

わたくしの

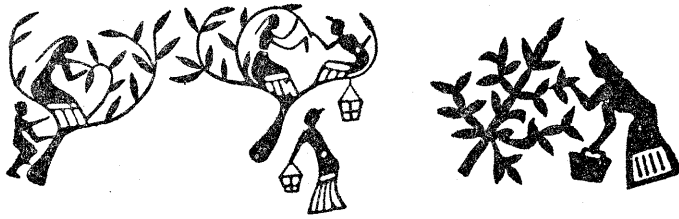
シルクロード ③

横張和子

パルミュラの絹織物

前々回、わたくしは絹の道を西方に向けて送られた中国絹を求めて、シリアのダマスクスの国立博物館にまで出かけて行ったことをお話ししました。その一九七四年の春、ダマスクスに長く滞在している民間の日本人は二十人にも達していなかったのですから、まだシリアはなじみの少ない国であるかもしれませんが、今、日本でもはやされているシルクロードの西の一端がここを通っていました。一九二〇年から三〇年代にかけて、シリアでは二つの大きな遺跡が発掘されました。その一つがパルミュラの大遺跡であり、その大商人の一族の墓から、それまで古文獻では知られていても、実際には認めることの出来なかつた中国遠来の絹が発見されたのでした。

ローマ時代、軽く柔く、しかも美しい光沢をもつ東方の絹は、西方の人々からセレスと呼ばれ、それを作り出す国はセリカと呼ばれていました。この麗しい糸や織物を作るセレスはアウグストゥス帝の時代（前三〇～後一四）の文人や詩人たちが好んで題材とするところでした。詩人ヴェルギリウス（前七〇～一九）は「セレスは繊細な羊毛を森の木の葉から梳き出す」とうたい、プリニ



戦国銅器にみえる桑とりの図

ウス(二三一七九)は「羊毛のよう
な、彼らの森の産物」といい、また
詩人のシリウス・イタリクス(二五
一〇二)は「今や、太陽は、昨夜
西海に放ちし馬の群を駆りて、東邦
の岸に至たり、新しき曙光にまぎ
ざめしセレスの人は、ふたたび和毛^{ワモ}
生る林より生糸を紡ぎはじめぬ」と
詠んでいます(以上、護雅夫「古代
における東西文物の交流」平凡社
『東西文明の交流 漢とローマ』よ
り)。西方の人々にとって中国の絹
は昆虫から得るもののようにだが、そ
れは羊毛のようなものであると考え
それが家蚕の飼育で計画的に得てい
たものであることはまだ知っていな
かったのです。中国で蚕^{カイコ}を飼って
絹をとることは、中国の帝(前二六
五〇ごろ)がその妃西陵に行かせた
のがはじまりであるとされています。

す。殷代(前一六〇〇―一〇二八ごろ)には確実に絹織物は存在
していますし、戦国時代には養蚕や機械は女の重要な仕事となっ
ており、量産も可能となりました。

ところで地中海地方でも古く絹に似た繊維で作られた薄い織物
が知られていました。有名な「コス布」です。この織物はまるで
ガラスそのもののように、ローマ皇帝ヴェスパシアヌス(在位六
九―七九)に重用された、さきの大ブリニスはこれを「婦人を
裸にする薄衣」といい、これが、とくに、夏の衣服として紅燈の
巷から上流社会にもひろまって、婦人ばかりか男子もまたこれを
好んで着用したことを憤慨しています。この繊維について、アリ
ストテレス(前三八五あるいは三八四―三二二)は「ある大きな
幼虫―角のようなものをもっている―が、つきつき変態して、ま
ず青虫の類、ついで *bombylius* やうに *neotalus* になる。この
幼虫は六ヶ月でこのような変態をとげてしまう。この生きものか
ら婦人たちは *bombycina* をひき出して、練りとり、そして、そ
れを織る」といい、この繊維ではじめて織物を作ったのがコス島
の女 *Pamphie* であったと述べているのです。ここに用いられて
いる術語がすべてギリシア語なので、これが中国の養蚕を伝えた
ものでないことは確かです。これは山繭の一種で、オークの木や
糸杉の木に棲息し、トネリコの樹上で繭を作る *Lastocampa* *Orus*

だとされています。その繭の大きさは八センチから九センチにもなるようですが、厚さは薄く、採れる量も少く、やがて中国から流入する生糸や絹布にとって代えられていったと考えられます。

中国から西方の国に絹が運ばれていったことは東西の古文獻が記し、関連記事は少くないのですが、その一つ、南海の貿易を記した「エリュトウーラ海案内記 *Periplus Maris Erythraei*」にも書かれています。この案内記の年代決定は諸説ありますが、紀元四〇―七〇年のころとするのが大勢の説です。これによると、中国の生糸が西インドの港、カンジス河の河口にあるバルバリコムで、船に荷積みされ、季節風によって、メソポタミアの方に輸出することが（三九節）、またもう一つの港、ハリユガザに、内陸の大きな都 *Tana*（支那か）からセーレスの羊毛（真綿）と糸と織物が北方のバクトリアから運ばれてきていることが分ります（六四節）。

さて、本題に入らねばなりません。ここパルミユラの塔形の墓から出土した絹資料はフランス人 R・フィステル氏によって整理され、詳しく検討されました。氏によれば、パルミユラ出土の絹の中にはコス産の山繭の種類の繊維は見当らず、いずれもが中国の絹糸であることが述べられています。

パルミユラの絹資料はほかの織物、亜麻布や毛織物と同様、ど

れも小断片化して、原の形を知る由もありません。この地の埋葬法は死者のための特別な屍衣というものはなく、遺骸を包んでいたのは、生前に着ていたものの使い古しでした。亜麻布や毛織物では、断片化してしまっても、壁画や彫刻の例から原の形を知る手がかりを得ることができませんが、絹衣の場合はどのような形に仕立てられていたか、うかがい知る他の資料がありません。ここでは断片化したそれらから、むしろその時代の、それは凡そ中国の後漢の時代（二五―二二一）に相当しますが、中国絹の特色や性格を知るといふ利点をとり上げるべきでしょう。それに中国絹の西漸の実態も把えられることでしょう。

断片類を整理した結果は①無地の平絹、②刺繍、③平地綾、④経錦、⑤絹と亜麻の交織布、⑥近東産の平絹、⑦絹の綾織、⑧中国の絹に刺したシリアの刺繍です。①から④までは中国産とみなされ、⑤は中国とローマの中間の特色を示して、西域のオアシスの産と考えられるもの、⑥から⑧は確実に西方産とされるものです。もちろん割合は中国産が圧倒的です。これらを一つずつみていきましょう。シルクロードの名は人口に膾炙していますが中国から実際にどんな種類のものが送り込まれていたのか、文献で知り得るのは、真綿とか糸とか織物とか、漠然としたものです。パルミユラの絹は、失われてしまったものは夥しいものであったに

違いありませんが、しかしそれを具体的に示す唯一の資料なので、紙面の都合で二回ほどにわたることをご了承下さい。

①平絹 砂ぼこりや砂礫にまみれ、あるいはミイラを包む亜麻布の殻にはりついていたボロ同様の絹の断片を、すぐさま産地別



漢画像石にみえる機織の図

に分類することは、東西の織物の特質がまだよく知られていなかった時、非常に困難な作業であったと思います。調査者フィステル氏もそれを述懐していますが、その大きな労苦の末に整理された一群の絹がもたらす諸々の事項から、逆に中国絹の特質が帰納されてきます。平絹の部に集められたものは、0.1 ~ 0.2 ミリの太さの家蚕糸 Bombyx-mori で、経糸と緯糸とが一對一に交錯する平織です。ここに集められたものは、どれも、経糸の方が緯糸の数を上廻っています。経糸の一センチ間の密度は四〇本代から一〇〇本、一二〇本にもなっていて、経緯の割合は緯糸の一・五倍から二倍、三倍となっています。そのため、緯糸は経糸におおわれ、みえないというものが多いのです。その場合、経糸はやや長くのびて、緯糸と交錯しますから、布の面には経糸の横畝があらわれます。織幅は五十センチ前後で、このような絹布を織ったであろう織機が漢代の画像石の浮彫にみえています。こうした無地の絹は繭から直接繰りとった生糸で織り出され、織り上ってからアルカリの液の中に浸され、生糸をとり囲んでいたセリシンをとり除いて、絹特有の美しい光沢を出します。そして染色されます。西方へは生織のまま送り出されていたようです。

②刺繡 パルミユラの刺繡では二種の手法が識別されます。つ



パルミューラ記念門

まり、これは⑧の刺繍に対照されますが、一見してその相違は明らかです。この種の手法は一九二四年から二五年にかけて行われた北蒙古ノイン・ウラの匈奴の墓から出土した中国刺繍や、また近年中国の考古学者が行った（一九七二）湖南省長沙市馬王堆の

前漢墓から出土した凄絶なまでの細密な刺繍にみえ、中国産と断定するのはもはや難しくありません。パルミューラの中国刺繍は優良な横畝地合の平絹に、濃淡の青、赤、茶などの色糸を用い、鳥のような図を刺しているようですが、断片で、全くその全容を知ることが出来ません。しかしノイン・ウラの中国刺繍から連想して、これと同じような雄偉な有翼の竜を同様の技法、鎖繡で刺しているものようです。中国の本土においても刺繡絹は最も高価なものであったことですから、パルミューラで求められた時には、想像を超えた高値であったことでしょう。ローマ皇帝ですら、容易に絹の衣をまとうことが出来なかつたときです。富裕ではあつたかもしれませんが、一國の支配者たるものでない商人が、このような豪華な絹をまとうことが出来たのも、パルミューラが東西交易の幹線に沿い、オリエントきつての有力なキャラバンの都であつたからです。ここで、わたくし共になじみ薄い隊商都市について述べてみます。

隊商都市というのは、砂漠を走っている交通路上のオアシスに発生した宿駅が、交通量の増加に伴って拡大し、「都市」にまで発展したものです。隊商都市は砂漠を行く隊商に水を補給するところが不可欠の要件であります。そのほか都市であるために、神殿、隊商宿、市場、劇場、記念門などの設備をそなえていなければ



▲ 綾地綾文綾



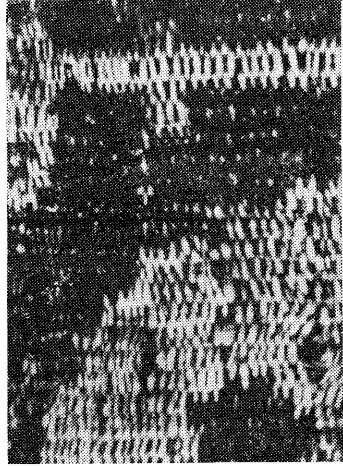
▲ 平地綾文綾

(共に正倉院蔵 8世紀)

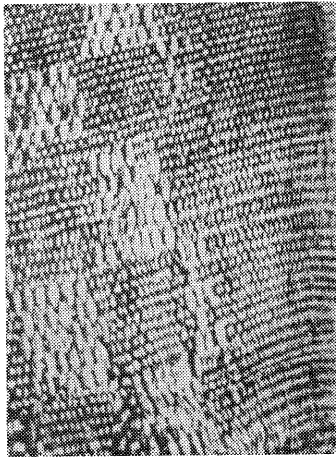
ばなりません。このような隊商の都市では、その政治の担手は定期的な市場や交易を行う商人たちでありました。そしてその主要な財源はその地を通る隊商に課す関税によっていました。ですから一たび交通路が変り、物産の交流が杜絶すると、砂漠の中で、空中楼阁のように繁栄していた都市は、一朝にして死の町と化してしまふのでした。

③平地綾 経糸の密度六六本、緯糸三八越というような横畝地合の平織の地に、地の緯糸を三越浮いて一越に沈む長い経の浮糸で模様を織り出しているものです。このように地と文の組織を異にして作る紋織物をわが国では綾と呼んでいます。綾には地を平織にしたものと、綾織にしたものと二種あります。しかし中国の文献では地を平織したものを「綺」、地を綾織したものを唐代の「綾」としているようです。ですからわが国の上代の綾について「綾」として「綺」、綾地の綾を「綾」というべきかと考えますが、長い間どちらも綾と呼ばれて来ているので、わたくしはこれを区別して平地綾、綾地綾の名称を使用することにしています。

この二つはどちらも単彩の紋織物で似たようなものですが、それが生まれ、存在した沿革の歴史は大変違ってきます。平地綾は股代のむかし(前一六〇〇)から存在しますが、綾地綾は唐代



▲ 漢錦の組織
2～3世紀

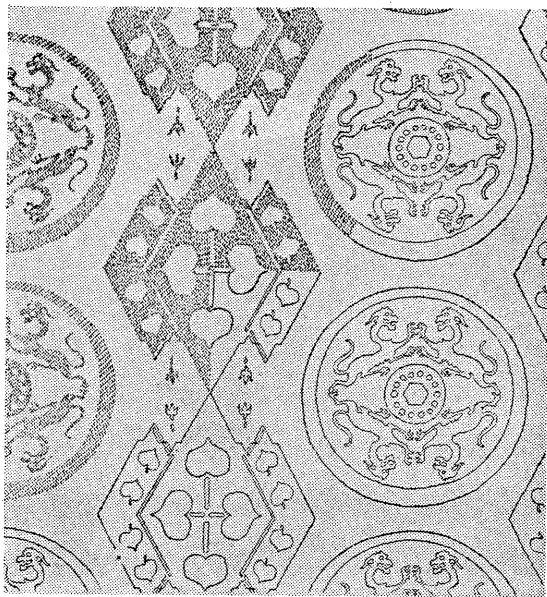


▲ パルミュラの平地綾
の組織

(六一八―九〇七) になってから生まれてきたものです。綾地綾は平地綾の技術の発展上にあられたという見方が行われてきました。綾地綾はよそからの影響、つまり西方から

の綾織(斜文組織)の波及によって生まれてきたのです。唐朝の西方文物歓迎の風潮の中にペルシア風の三枚綾緯錦に呼応して作られたのです。綾織というのは、今日、毛織物の洋服地によくみかけるサージ織のことです。この織り方は古代中国の絹織物の中にはなかったのです。このことは研究者の間でも余り明確に認識されていません。しかし、わたくしがパルミュラの絹織物の断片資料の中で、ちょうど⑦になる絹の綾織をみて深く印象づけられたのが、平織と綾織の生い立ちの相違でした。このことについてはまた⑦絹の綾織の項で述べるとして、問題の平地綾について、これが頗る平織的な織物であることを述べなければなりません。

普通、綾は、その文様の組織では緯糸を三越浮いた長い経の浮糸がとなりのそれと接して連続して斜行して、一見綾組織風になっています。この点から、この種の紋織物がわが国では綾と呼ばれる所以なのですが、織技上これは本物の斜文組織ではないのです。ですから平地綾は、斜文組織すなわち綾組織とは無関係なのです。パルミュラの平地綾ではこの点が一層顕著で、文様を作る浮経は、ここでは斜行せず、相隣りする浮経の間に平組織が織り込まれていて、①の平絹でみたような横敵地様の組織を作っています。それはまた漢代の経錦の組織にも似ていて、漢錦に相呼応させたようなところがみえます。しかしこの平地の特色は、この



パルミュラの平地綾の模様

技法によれば、本来の平地綾の製作工程を半減することが出来るということなのです。これによって平地綾の装飾は効果は少しも変らないばかりか、一層明確に文様を平地に映し出す効果すらもたらしています。つまり、これは中国の学者夏鼐氏が云っているように、中国の綾としては独自の、西方向け輸出品として、特に計画された中国絹の目玉商品であったのではないかと考えられます。

す。これは漢中では用いられなかったようです。何故ならば、中国における発掘品にはなく、またわが上代綾にも見つけ出すことができません。この平地綾の意匠は前漢来の伝統をよくあらわして、中国特産の絹の面目を押し出していますが、しかし平明、軽快な趣向に整え、西方人の好みをもよく意識していることが分ります。中国人の絹の道にかけた商魂のようなものすら感じます。

ところで、このような中国の絹は、勿論、衣料として用いられたではありません。しかし、多くの場合、それは解体されてしまったのです。ほぐして、もう一度糸にされ、そして緩やかな織りの、透けてみえるような薄い布に再び織り直されたようです。先のプリニウスはいつています。「セレスはわが国の婦人にまずそれをほぐし糸にし、それを織り直す二重の仕事を課す」(博物誌六卷二十節)と、またローマの詩人ルカヌス(三九―六五)はその叙事詩『内戦』に、「クレオパトラの白い胸はシドン(地中海沿岸の都市)製の織物の下に透けて見えたが、その織物はセレスのおさで織られて目がつんでいたので、エジプト人の裁縫師がほぐして糸に撚りかけ、織り直したものであった」(一〇卷一四一―一四三)と記していますから。

(山脇女子短期大学)